専門演習活動報告！根来ゼミでの合宿は実体験重視です

心理臨床学科障害児心理専修4年
可兒郁美（かに　いくみ）　岐阜県・加茂高校出身

根来ゼミは夏休みを利用して、三重県へ1泊2日のゼミ旅行に出かけました。

1日目は伊勢神宮に参拝に行き、おかげ横丁で伊勢名物をたくさん食べ歩きました。あいにく雨が降っていましたが、短い時間で伊勢の名物を堪能することができました。午後からは四日市市へ移動し、ゼミのみんなでおいしい中華料理を食べ、有名な工場夜景も見ることができました。ゼミの仲間ともこれまで以上に仲良くなるきっかけとなり、とても充実した楽しい1日となりました。

2日目は、今回のゼミ旅行の1番の目的である鈴鹿病院、三重県立杉の子支援学校の見学に行きました。これまでにもゼミで特別支援学校や、医療型児童発達支援センターを見学させていただいていました。今回は重症心身障害の方が入院する病院も見学させていただけるという事で、講義で学んだ筋ジストロフィー、重症心身障害について、実際に当事者の方と会い、病気や障害の実態を知り、どのような支援、療育が行われているのかを知ることで、筋ジストロフィー患者や、重症心身障害の方に必要な支援とは何かを学ぶことが私たちの見学の目的でした。

鈴鹿病院では、筋ジストロフィーの方や重症心身障害の方の病院内での生活について、さらに、神経難病患者の治療とケアがどのように行われているか話を聞くことができました。さらに療育として行われるカラオケ大会を見学させていただくこともできました。

隣接する杉の子特別支援学校の見学では、夏休み中だったため子どもたちは学校にはいませんでしたが、先生方は新学期の準備をされており、その合間にどんな方法で子どもたちに支援しているのかなどお話をきくことができました。

ゼミのメンバーは、障害児心理専修と学校教育専修の学生であるため、講義やゼミで障害者の生活や、教育について学ぶ機会はたくさんありますが、今回の見学を通して、実際に障害のある方たちの生活を目の当たりにすると、講義で学ぶだけでは感じることのないことや、分からないことがたくさんあるのだと気づかされました。根来先生は「百聞は一見に如かず」という言葉を大切にされていますが、自分の目で見ることの大切さを感じました。私たちのゼミでは今後もどんどん学外に出かけ、自分の目で見ることを大切に活動していきたいと思います。

東内ゼミでは初めての体験がいっぱい

子ども発達学科保育専修4年
南川真実生（みなみかわ まさき）三重県・四日市西高校出身

バサバサと、さして清潔感の無い白い羽をまき散らしながら頸椎を外されるニワトリを見たことがあるでしょうか。私は初めて見ました。だらりともたげた首を見ながら脚を握り逆さ吊りにして、生きているあたたかさが消えていく瞬間を感じたことがありますか。私は初めてそのことを感じました。

食物連鎖においては上部に属する者たちはニワトリを牙や爪で刺して食い漁るでしょう。人間は熱湯にニワトリの死骸を突っ込んで羽を毟り、腸を出して腱を断って骨と肉を引きはがします。血合いとか内臓の切れ端をきれいに掃除したら、スーパーでよく見る鶏肉が出来上がります。

これは知識と文明によって食物連鎖の頂点に立った人間の“食事”のプロセスです。フライドチキンは好きですか。私は大好きです。掛け布団くらいの面積であっても食べきれる自信があります。ニワトリがフライドチキンになるまでの数多の工程をご存知ですか。私は、有精卵からひよこを孵化させることとあわせて初めて体験しました。

醤油は大豆からできています。腐敗と発酵の違いがいまいちわからないけれども、漫画『もやしもん』で見たような菌たちが大豆にいろいろやって「もろみ」というものを作り、それを絞ると醤油が出てくることは知っていました。あなたも知っているでしょう。

ではジャッキを逆さまにしたような装置をギコギコ鳴らして醤油を絞り出し、絞りたての醤油がどれほどしょっぱいかということも、ゼミの取り組みの中で初めて学びました。

東内ゼミでは自然の中で「知ってるけれど知らない事」を学ぶことができます。人によってはしょうもない事かもしれないことが、別の人にとっては黄金体験になるかもしれません。ちょっと想像しただけでワクワクしたあなたの探求心が拓かれることを願っています。

大学祭においでん！！　2016年度日本福祉大学祭実行委員会

この号の主な内容

2016日本福祉大学祭に向けて
入学後の友達づくりを応援しています　1

保育所実習・施設実習体験記
私たちの先生を紹介します　2

幼稚園、中学校、高等学校での
教育実習体験記　3

専門演習ゼミでの合宿
専門演習活動紹介　4

We Love こたつ

― 日本福祉大学　子ども発達学部ニュースレター ―

第16号 2016年10月1日発行

2016日本福祉大学祭に向けて

心理臨床学科心理臨床専修3年
岩田リィナ（いわた りぃな）愛知県・日本福祉大学付属高校出身

こんにちは。日本福祉大学祭実行委員会です。毎年11月に行われる大学の一大イベント「大学祭」を盛り上げるため、日々活動しています。2015年度は、模擬店企画、ステージ企画、フリーマーケット企画、学内および学外団体のフリー企画など多くのイベントで盛り上がりました。

また、大学祭実行委員でも、毎年恒例の移動動物園やガラポン企画など大人もこどもも楽しめるイベントを企画しました。さらにゲスト企画として、Silent Sirenによる音楽ライブと本郷奏多さんによるトークショーを開催し、たくさんの来場者に楽しんでいただきました。大学祭の締めくくりである閉会式では、豪華景品が当たる抽選会や音楽に合わせて光きらめくレーザーショーを行い、思い出に残る大学祭となりました。

日々の活動では、大学祭当日を盛り上げるために毎週木曜日に全員参加の「全体会」という会議を開き、各企画の提案や当日準備の打ち合わせなどを行っています。よりよいものを皆で作り上げたいという雰囲気のもと、1年生からでも積極的に発言することができます。大学祭実行委員会には、出店出演団体のお世話をする局、大学祭独自の企画を考える局、ゲストを招く局、広報を担当する局、実行委員のサポートをする局など、様々な局があります。パソコン作業が得意な人、デザインが得意な人など、自分たちの持ち味をそれぞれの局で発揮しています。優しい先輩がたくさんいるのも魅力のひとつです。

そんな大学祭実行委員会はひとつの大きなチームであり、大切な仲間です。日本福祉大学祭が地域の皆様方にも楽しんでもらえるような心に残る大学祭となるよう、私たち自身も楽しみながら仲間とともに取り組んでいます。

入学後の友達づくりを応援しています

心理臨床学科障害児心理専修3年
千葉頌子（ちば　しょうこ）　静岡県・富士宮西高校出身

不安と期待の入り混じる桜の季節は新入生にとって何もかもが刺激的な時期です。日本福祉大学では、入学して間もない新入生に向けて、友達作りのきっかけとなるように学部ごとに新入生セミナーを行っています。子ども発達学部では4月21日（木）3・4限に新入生セミナーを開催しました。

私は実行委員としてこの企画に携わりました。2年生となり、多忙さが増す中で、実行委員が集まることすら難しいという状況に焦りを隠しきれないこともありました。話し合いや全体への連絡・確認は“LINE”に頼りがちでしたが、実際に集まっているわけではないために、実行委員同士の意思の疎通が不十分という事態に幾度となく直面しました。“LINE”は便利なツールですが、1人1人が時間を割き、そのわずかな時間を共有することで、進捗状況ははるかに進展すると身をもって痛感できました。

いよいよセミナー当日になり、実行委員それぞれに期待や不安、緊張、焦りがあり、様々な感情が空気を漂っていました。しかし、いざ企画がスタートすると、当初は遠慮がちに見えた新入生も徐々に熱を帯び、企画を楽しんでくれていることが言葉がなくても伝わってきました。新入生の笑顔や実行委員の充実した表情が体育館いっぱいに広がっていました。「実行委員をやってよかった。」当日までの苦労を忘れたかのように、自然とそう思えた瞬間でした。

新入生セミナーを通して、新入生の友達作りを応援できたかどうかも大切ですが、企画・運営に携われたことが実行委員にとっては何より大きな学びになりました。しかし、こういった経験は大学生だからできるわけでなく、やはり自分で行動して様々なことに挑戦していくからこそ得られるものだと感じました。自分の行動力を自信に、これからもたくさんの経験をつんでいこうと思います。

保育所実習で見る保育士の姿

子ども発達学科保育専修4年
横川遥香（よこかわ　はるか）　岐阜県・加茂高校出身

保育所実習で一番心に残ったのは、保育者の子どもに寄り添う姿です。保育園には通常クラスと支援クラスがありました。どちらのクラスにも実習で入らせて頂きましたが、まだ発達に差がある子どもたちに対して保育者は一人ひとりの成長に合った支援や対応を見つけていました。

また、どちらのクラスでも「子どもを否定しない」保育が徹底されていました。やめなさい、などの否定語は無意識のうちに使われることがとても多いです。子どもの行動を否定するのではなく「〇〇すると危ないよ。」など何故やってはならないのかの意味を教えることを大切にしたい時期だと改めて確認しました。また失敗経験や成功体験を繰り返しながら成長する時期です。失敗だけを責めるのではなく、失敗したらどうするかを子どもと考えることも必要だと学びました。

保育場面でコップを振り回していて牛乳をこぼした子どもがいました。私なら「コップを振り回したらこぼれちゃうからね。」と言うところでした。その場面を観察していると、保育者の方は「〇〇ちゃん、こぼしたらどーするんだっけ？拭けば大丈夫だからね。」と子どもに言いました。こぼしてしまったことに罪悪感を感じてどうしようか迷っている子どもには最適の声かけなのではないかと思います。

一人ひとりの子どもたちに寄り添い、成長を見守る中で気付けることが多くあり、個人によって違った保育方法が見つかります。保育者同士の連携、保護者との関係をより良く作るなど、見守られている温かい環境があってこそ子どもたちがのびのび成長していけると感じました。

施設実習で学んだ3つのこと

子ども発達学科保育専修4年
大山香菜子（おおやま　かなこ）　富山県・福岡高校出身

今回6月の施設実習（母子生活支援施設）の課題として、私は次の3点を設定していました。まず、入所者（子どもと母親）と積極的にコミュニケーションをとり、気持ちに寄り添うこと。第2に、入所者に合わせた支援を行うための連携のしかたを理解すること。第3に、安心して日常生活が送れるような環境整備について具体的に学ぶことです。しかし実習現場においては、これらのことだけではなく、その基盤になるようなことを深く学ぶことができたのでした。それは以下の3つです。

1つ目は、援助においては「気持ちの切り替えをすること」も重要だということです。実習中、措置変更で退所する子どもがいたのですが、私はそのときの悲しい顔が頭から離れませんでした。一方、職員の方々は入所者に笑顔で前向きな言葉をかけ、次に進もうという姿勢を保っていたのでした。悲しいことがあっても入所者が不安にならないよう、気持ちを切り替えることが大切なのだと強く心に刻みました。

2つ目は、「意識的なつながりを大切にすること」です。良い連携をとるためには、笑顔を絶やさないこと、感謝の気持ちをきちんと表していくことが重要だと実感できました。意識的に相手の立場になって考えていくことで、職員同士や入所者と信頼関係を結ぶことができるのだと思いました。

3つ目は、「状況に合わせ、臨機応変に対応すること」です。実習のプロセスでは、予測していないことが次々と起こりました。施設では利用者や子どもの様子や状況の変化に対して敏感になること、そしてすぐに対応できるような判断能力が必要なのだと実感できたのです。

施設では、私たち実習生をできるだけ施設の職員と同じようにみなして指導してくださいました。そうした中で、それぞれの家庭の背景や生き方を知り、関わり方や接し方を入所者に合わせることの大切さを根本的に理解できたと思います。以上のように今回の実習では、講義では学ぶことができないことも深く学ぶことができました。

私たちの吉野先生を紹介します

心理臨床学科心理臨床専修3年
石原果歩（いしはら　かほ）　静岡県・下田高校出身

今年の4月に日本福祉大学にやってきました、吉野真紀先生の紹介をします！

吉野先生は心理アセスメントや病院臨床を中心とした臨床心理学を専門とし、大学の先生としてだけではなく、臨床心理士として病院に勤めたり、スクールカウンセラーとして小・中学校に勤めたりと、様々な臨床経験を積まれています。また日本に数少ない「性別違和」を専門とする機関での経験もあり、現場ならではの貴重な体験を私たちにたくさん教えてくれます。

吉野先生は私たちの“興味のあること”を第一に優先して学ばせてくれます。前期は、“精神障害”と“犯罪心理学”という2つのキーワードをテーマとし、そこに心理アセスメントの視点をもってゼミ学習を進めました。私たちが自分で調べてきたことを発表し、皆で意見を出し合い、疑問点を挙げたり情報交換をしたりすることで、どんどん学びを深めていくことが出来ます。また自分たちの興味のある分野なので、全員が積極的に取り組むことが出来ます。

そんな充実した学びができる吉野ゼミは、なんと先生を含めて全員女子！ということもあり、“はんなり”という言葉がよく似合う京都出身の吉野先生を筆頭に、ほんわかとした雰囲気で日々過ごしています。美浜の自然に驚いたり、いつも教室に慌てて入ってきたりする吉野先生の魅力の発見も、私たちの日々の楽しみです！

これから私たちは卒業研究に取り組みますが、興味のあることを自由に学べるこの吉野ゼミで、楽しみながら自分たちの研究をしていこうと思います！

毎日が充実していた幼稚園実習

子ども発達学科保育専修4年
原彩夏（はら あやか）　三重県・メリノール女子学院高校出身

4週間もあり今までで一番長く、集大成になるであろう幼稚園実習、始まるまではかなり不安でした。実習が近づくにつれ不安が大きくなり、何も手につかなくなっていました。

いざ実習が始まり、子どもたちと顔を合わせると不安を感じたままの自分ではいけないと思わされました。子どもたちが園のことや好きなことなどを話すなど積極的に関わってくれようとしたからです。子どもたちが一生懸命な姿を見ると私も全力で子どもたちと向かい合わないといけない、不安だからと言って自分から動かないのはいけないと初日から感じさせられました。

子どもたちと生活する日々は毎日が本当に面白かったです。毎日のあそびを見てみても同じことをしているようですが内容は変化していました。そのあそびに自分がどのように関わっていくと深まっていくかがとても難しかったです。そのため、あそびを広げる事ばかり考えて提案ばかりしてしまう事もありました。しかし、いちばん大切なことは笑顔で自分も楽しみながら子どもとかかわるということだと気付きました。自分も楽しむことで実習がより楽しくなっていきました。

子どもたちが帰った後は全体活動で使う画材の準備などをしていました。子どもたちが帰ると疲れがどっと出て正直、眠い時もありました。しかし、この作業が子どもたちのためになると思えばやる気が起きました。いつの間にか子どもと直接かかわっていないときにもどこかで子どもたちの事をずっと考えるようになっていました。

勉強の日々で充実していた4週間でした。終わって1カ月がたった今でも子どもたちのことを思い出すことがあり、最終日にみんなからもらった手紙を読んでいます。幼稚園実習は様々な面から私を大きく成長させてくれるものになりました。

現場だから学べる中学校実習

子ども発達学科学校教育専修4年
斉藤 葵（さいとう　あおい）　愛知県・栄徳高校出身

2週間の中学校教育実習を終え、今振り返ってみると、期間中はとても大変で毎日がせわしなく過ぎていきました。特に今回の中学校の実習は、前回の小学校の実習と比べて2週間という短い期間であったため、この少ない時間で何を学ぶかが重要でした。せっかく現場に立つことができるので多くのことを学びたいと実習前は意気込んでいましたが、いざ実習が始まると時間が足りないなあと感じながら毎日の授業準備に必死でした。

忙しい中、生徒と接する時間だけを特に大切にすることを目標に実習に臨みました。生徒と多くかかわりを持つことは大変で、話しかけても恥ずかしいのか最初のうちはあまりうちとけてもらえませんでした。どうにかしようといろいろ話題を提供することで生徒たちの興味のあることがつかめ、会話がはずんでいくことが実感できました。

生徒とどう接したらいいかわからないという悩みは教育実習を行う際に必ず出てくるものですが、実際に経験してみると生徒はこちらからのアクションに必ずと言っていいほど応答してくれます。積極的にかかわりを持とうとすることが重要だと感じました。生徒とかかわることで、生徒たちはいろいろなことを私たちに教えてくれます。思わぬ一面や、学校や学校外で知った知識など、私たちが知らないことも、そして中学生がどのような心理状態にあるかも感じることができました。

楽しい思い出の高校実習

心理臨床学科障害児心理専修4年
伊東夏実（いとう　なつみ）　愛知県・西陵高校出身

5月23日から3週間、名古屋市内の高等学校で教育実習を行いました。担当クラス(HR)は2年生、教科は現代社会で3年生のクラスで授業を行いました。自分の母校での実習ということで顔なじみの先生たちも何人かいる中、その先生たちの“生徒”に戻ることなく、きちんと“教育実習生”としてやり抜こうと心に決め、実習がスタートしました。

私が実習をさせていただいている期間は、ミュージックフェスティバルという行事が間近に迫っており、その練習が盛んな時期でした。朝と放課後の練習に私も参加し、一緒に歌ったり振り付けを覚えたりする中で生徒たちとの距離が近くなったように思います。また、担当の先生のご提案で朝のSTで手話講座を行いました。生徒たちも手話にとても興味をもってくれ、廊下ですれ違ったときには教えた手話で挨拶をしてくれたときには心から嬉しく思いました。さらに高校時代所属していた硬式テニス部の練習を見学したり、実際にコートに立って現役部員とテニスをしたりしました。

実習授業では、事前打ち合わせで教科担当の先生にぜひグループディスカッションや発表を取り入れた授業をやってみてほしいと言っていただき、『裁判員制度』を題材にアクティブラーニングを実践することができました。指導案、配布プリント、板書計画…を生徒たちのことを考えながら作成するのは確かにとても大変ではありましたが、楽しい！と思えている自分に正直驚きました。

教育実習が終わった今、HRクラス、授業クラス、硬式テニス部…の生徒たちに会いたくて仕方がありません。私を「先生」と呼んでくれた生徒たち、丁寧にご指導いただいた先生方のおかげで生徒指導・特別活動・教科指導のすべてにおいて充実した教育実習となりました。